

1998年度 社会学部優秀卒業論文賞（安田賞）受賞論文

選考委員代表 安 藤 文四郎

本年度の安田賞には、別表のように10のゼミから10点の卒業論文が推薦されたが、選考の結果、そのいずれもが力作と評価され、安田賞受賞のはこびとなった。

またそのうち、梅本亜希さんと中野裕樹也君の論文が本年度の最優秀論文に選ばれた。梅本論文は、衣服や化粧品に代表されるファッションの問題を取り上げ、ジンメルやニーチェ、最近のものでは鷺田清一の文献を援用しながら、ファッションのもつ社会的・文化的機能を、身体論、モード論、誘惑論という3つの角度から論じたもので、審査委員の高い評価を得た。

中野論文は、E. S. Bogardus の提案する「社会的距離尺度」の概念を用いながら、著者自身の立てた3つの仮説の検証をめざしたものである。その検証のために、R. Inglehart の第二回世界価値観調査の膨大なデータを分析していることと併せて、学部の卒業研究のレベルを遥かに越えるものと高く評価された。

| 最優秀論文 | 卒業論文名 |
|---------------------|--|
| 梅本 亜希 (宮原浩二郎ゼミ) | ファッションの魅力 — 身体・モード・誘惑をめぐって — |
| 中野裕樹也 (真鍋 一史ゼミ) | 社会的距離における一次元性の研究 — 「世界価値観調査データ」による検証 — |
| 優秀論文 | 卒業論文名 |
| 加藤 潤三 (野波 寛ゼミ) | 公共財に対する個人の認知要因の検証、およびその要因から成る公共財の認知構造の確立 — 公共財の心理的定義を目指して — |
| 黒川雅代子 (高田 眞治ゼミ) | グリーフケアにおけるセルフヘルプ・グループの役割について |
| 鈴木 契 (難波 功士ゼミ) | アメリカにおける企業の文化芸術支援 |
| 田原 桂子 (荻野 昌弘ゼミ) | 回線のなかのコミュニティ |
| 中野 晃孝 (大谷 信介ゼミ) | 携帯電話が大学生に与えた影響について |
| 野本 淳子 (居樹 伸雄ゼミ) | 海外派遣従業員をめぐる諸課題 |
| 宮内 尚起 (田中 耕一ゼミ) | 脱「合理主義」としての「笑い」 |
| 森本 一司 (川久保美智子ゼミ) | 総合電器メーカー（東芝）の分析からみた日本的経営の崩壊と新たなビジネスモデルへの考察 |

〈指導教授推薦文〉

指導教授 宮原 浩二郎

梅本亜希「ファッションの魅力—身体、モード、誘惑—」

ファッションのもつ魅力を、身体論、モード（流行）論、誘惑論という三つの視点から、多角的かつ立体的に解明した、すぐれた論文です。

一般的に言って、ファッションやモードをテーマとした論考は、派手できらびやかな言葉づかいを多用するわりに、無内容なものが多いと思います。社会学者の論文でもファッション雑誌の記事に脚色した程度のもものが多く、ましてや学部学生のレポート・卒論では雑誌記事の真似事にすぎないようなものがほとんどです。

そのなかで、梅本亜希君の卒業論文『ファッションの魅力』は群を抜いています。高ぶったところがなく、妙な気負いや気取りもなく、平明にして的確な言葉づかいで一貫しています。「好きこそ物の上手なれ」という諺どおり、ブランド品を丁寧に選ぶ確かな選球眼に裏づけられた、見事な論文だと思います。

ジンメルを中心に、バルト、ボードリヤール、マクルーハン、鷺田清一などから引用していますが、その引用箇所を選び方、引用の仕方がじつに的確で感心しました。指導教員である私自身も、大いに勉強になりました（なお、紀要での掲載にあたっては、スペースの都合上、もとの論文に多数あげられていた図版・写真をすべて割愛せざるをえませんでした）。

〈指導教授推薦文〉

指導教授 真鍋 一史

中野裕樹也「社会的距離における一次元性の研究—『世界価値観調査データ』による検証—」

本論文は、R. Inglehart による「世界価値観調査データ」の二次的分析（L. Guttman の POSA のアイデアを援用した分析）による E. S. Bogardus の社会的距離をめぐる仮説の理論的な展開をねらったものであり、つぎのような評価すべき点が見られる。

(1) R. Inglehart の「世界価値観調査データ」という、きわめて大規模なデータ (large scale data) のコンピュータ解析に果敢に取り組んだということ。(2) 単にデータ解析ということだけでなく、各国でなされた質問紙の wording の検討（その翻訳も含めて）を行ったということ。(3) E. S. Bogardus の社会的距離の概念を「暴力」「病人」「異人」という三つのグループに広げて検討したということ。(4) 社会的距離の一次元性の検討のために L. Guttman の POSA (Partial Order Scalogram Analysis) のアイデアを援用したということ。(5) POSA は、イスラエル・ヘブライ大学で開発されたデータ解析プログラム・パッケージ HUDAP (Hebrew University Data Analysis Package) に入っているが、ここでは独自に SPSS のコマンドを利用して（具体的にいえば、「値の再割り当て」および「値の計算」のコマンドを利用して）POSA の理論的な格子状図形におけるそれぞれの回答パターンの度数と理論的な格子状図形に乗らない回答パターンの度数を求める方法を考案したということ。(6) このようなデータ解析を踏まえて、社会的距離およびその尺度化の方向について鋭い考察——人びとの社会的距離感が偏見と差別につながる問題性と、それを越える一つの可能性としての、一方におけるポストモダンの思想の出現と、他方におけるキリスト教的解釈での「隣人」の意味の検討——を展開したということ。

以上、この論文は、卒業研究の枠をはるかに越えて、この研究領域の学会でも通用するレベルに達しているものといえる。R. Inglehart 教授から直接に賞賛と激励をいただいたことも付記しておきたい。

最後に、残念ながら、本誌の紙幅の制約のため、ここでは本論文の資料—POSA による分析結果（これだけで120ページにもなっている）の部分—が、すべて割愛されている。しかし、じつはこの部分こそこの領域の今後の研究のために活用されるべきものといわなければならない。関心のある方は真鍋まで連絡されたい。